

日本語・日本事情遠隔教育拠点報告 2022

波多野 博頭 伊藤 秀明 陳 祥 渡邊 芙裕美

要 旨

本稿では日本語・日本事情遠隔教育拠点の2022年夏までの主な活動について、1) 本拠点が提供する学習コンテンツの最新利用状況、2) 新規コンテンツおよび既存コンテンツへの追加機能の説明、3) 2021年度秋から2022年度夏までに開催したシンポジウムおよび講演会の情報の3つに整理して報告を行なう。コンテンツの利用状況は、利用者数、ページビュー数、ダウンロード数に基づいてまとめ、新規コンテンツは「日本語マグネット」「にほんごアベニュー」「ALPS」を紹介した上で「SuMo Japan」グループ機能追加について述べる。また、本拠点が主催および共催したシンポジウムと講演会について報告する。

【キーワード】 教育関係共同利用拠点 TTBJ コンテンツ利用状況 講演会

Annual Report 2022 on the Center for Distance Learning of Japanese and Japanese Issues

HATANO Hiroaki, ITO Hideaki, CHEN Hsiang, WATANABE Fuyumi

[Abstract] This report summarizes the activities by the Center for Distance Learning of Japanese and Japanese Issues until the summer of 2022. It is organized into the following three sections: 1) the latest usage status of learning contents, 2) a description of new contents and additional functions to existing content, and 3) information on symposiums and lecture meetings held from the fall of 2021 to the summer of 2022. Content usage is summarized based on the number of users, page-views, and downloads. New contents include "Japanese Language Magnet", "Nihongo Avenue", and "ALPS". The addition of group functions to "SuMo Japan" is also described. Symposiums and lectures organized and co-sponsored by the Center are also summarized.

[Keywords] Education-related joint-use center, TTBJ, Usage status of learning contents, Lecture meetings

1. はじめに

筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター（CEGLOC）の日本語・日本事情遠隔教育拠点（日日遠隔教育拠点）は、2010年より文部科学省による教育関係共同利用拠点制度の認定を受けて運営されている。本制度によってCEGLOCの日本語教育部門が持つ強みを集中・強化するとともに、他大学との連携を進めることによって、大学教育全体として多様かつ高度な教育を展開するというねらいがある。

日日遠隔教育拠点は、多様な学習形態をサポートする学習コンテンツの開発や、テクノロジーを活用する教育人材の養成等を目的としている。2010-2014年度を第一期、2015-2019年度を第二期、2020-2024年度を第三期とし、本報告では第三期のうち2021年秋から2022年夏までの主な活動を報告する。

表1 日本語・日本事情遠隔教育拠点が提供しているコンテンツ

1. つくば日本語テスト集 (TTBJ)	プレースメントテストと診断テストの機能があり、言語知識と言語運用力を測定。
2. 日本語学習者辞書	約23万の語彙を収録し、一部で音声読み上げや画像素材を利用したマルチメディア辞書。
3. 場面・機能別日本語会話練習データベース	「SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE (SFJ)」に準拠した自主学习用映像教材。
4. 筑波ウェブコーパス	日本語ウェブサイトから構築した約11億語の大規模コーパス。
5. リーディング・チュウ太	読解に役立つ各種ツール（辞書、レベル判定）と読解教材を統合した学習支援サイト。
6. 学習項目解析システム	入力テキストを解析して、学習項目の抽出とレベル判定を行うウェブシステム。
7. にほんごアベニュー	話者・場所・場面・はたらきの4つで整理された発話・会話例が検索できるコンテンツ。
8. Nihongo123	スマートフォンやPCで利用できる日本語学習コンテンツ。初級・中級のレベルを用意。
9. Basic Kanji Plus	「BASIC/INTERMEDIATE KANJI BOOK VOL.1 & 2」に準拠した漢字学習アプリ。
10. SuMo Japan	ユーザー同士が質問・回答を行うことで、日本に住む外国人の生活を支援するアプリ。

2. コンテンツの概要と利用状況

日日遠隔教育拠点では、現在10種類のコンテンツを公開している(表1)。それらのうち、1～7はWebブラウザ上で動作するコンテンツとして、8～10はiOSとAndoroidで動作するアプリケーションとして提供している(8. Nihongo123はWebコンテンツとしても提供)。ここでは、それらの利用状況についての報告を行なう。

2.1 コンテンツの利用状況：TTBJ

TTBJの利用者数について、直近5年間の個人受験と団体受験の総受験者数、および一ヶ月あたりの平均受験者数をまとめて図1に示す。なお、2018年度と2019年度は、団体受験を休止していたため個人受験のみの数値である。また、2022年度は4月1日から8月31日までの5ヶ月間の集計である。

一ヶ月あたりの平均受験者数は2018年度から一貫して増加傾向にある。また、2020年度まで毎年約1.4倍増加していた個人受験の総数は2021年度にやや頭打ちになる一方、団体受験の総数は2020年度から2021年度にかけて約2.4倍となっており、2022年度8月時点でも既に2020年度の総数を超えている。

団体受験の利用機関数およびその内訳を図2に示す。図2から、団体受験の総受験者数だけでなく、利用機関数自体も増加していることがわかる。内訳は、ほぼ私立大学、民間・その他、外国の研究機関(大学含む)に占められている。

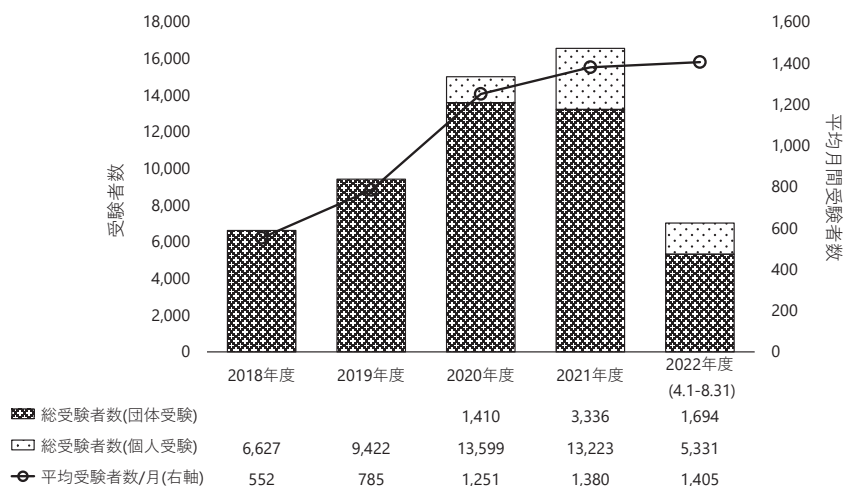


図1 TTBJ利用者数の推移

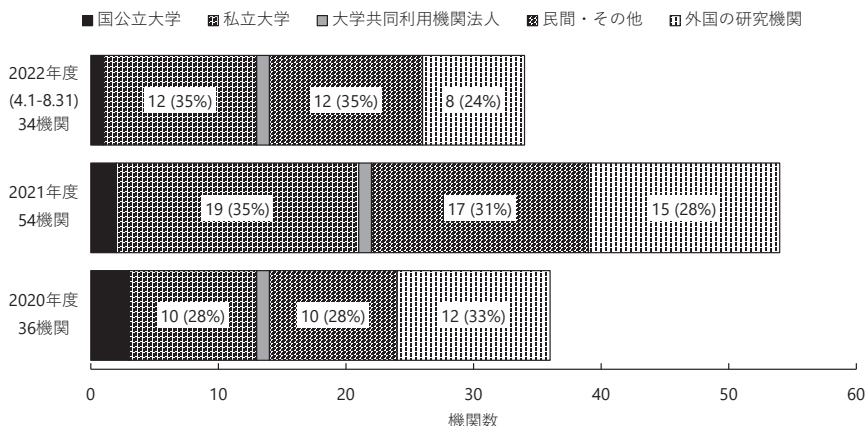


図2 TTBJ 団体受験の利用機関数および内訳

団体受験増加の背景として、オンライン教育環境が一般的となったコロナ禍において、TTBJ の特色が各機関に歓迎されたためと推察できる。一方、多くの教育機関で対面授業が再開されつつある 2022 年度においても利用に減少が見られないことから、テストとしての有用性が広く認められるとともに、TTBJ が提供する SPOT 等が日本語能力の評価として（補完的であれ）今後普及していく可能性が考えられる。この点は今後注視していきたい。

2.2 コンテンツの利用状況：Web コンテンツ

日日遠隔教育拠点が現在公開している Web コンテンツ（「日本語学習者辞書」「場面・機能別日本語会話練習データベース」「筑波ウェブコーパス」）について、直近5年間の総ページビュー（PV）数、および一ヶ月あたりの平均 PV 数を図3に示す。図3から「日本語学習者辞書」の PV 数が 2021 年度に大きく減少していること、「筑波ウェブコーパス」が極めて高い PV 数を有していることがわかる。

「日本語学習者辞書」の利用が大きく減少した背景として、2021 年度に提供開始となった「リーディング・チュウ太」の影響が考えられる。両コンテンツは語の難易度判定や辞書など機能的に重なる部分が多いため、拠点の提供として後発で新規の「リーディング・チュウ太」に多くのユーザーが移行したのではないだろうか。「筑波ウェブコーパス」が極めて高い PV 数を示す背景としては、本コンテンツが日本語の学習や教育だけでなくコーパス研究にも有用であるため、想定されるユーザー層が他よりも幅広いことがあげられる。「場面・機能別日本語会話練習データベース」は 2018 年度から安定的に利用さ

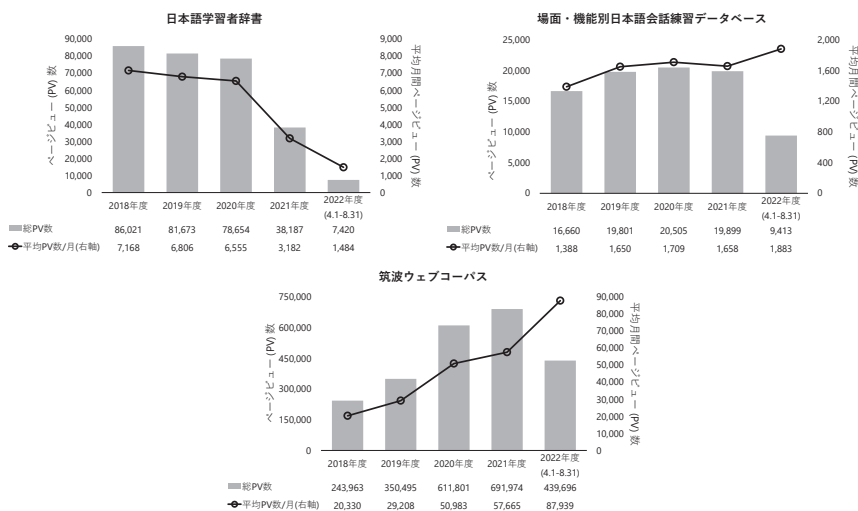


図3 Webコンテンツの利用状況（ページビュー数）

れているが、本コンテンツは授業形態（対面・オンライン）に依らずSFJの有効な映像教材であるため、需要が大きく変動しなかったと考えられる。

なお、2021年度に提供開始した「リーディング・チュウ太」の2021年度総ツール利用回数は342,411回、2021年9月に提供再開した「学習項目解析システム」の2021年度総アクセス数は22,194、2022年6月に公開した「にほんごアベニュー」は8月31日までのPV数が15,637であった。これらは他のコンテンツと比較しても大きな数値であり、今後も多くの利用が期待できる。

2.3 コンテンツの利用状況：アプリケーション

日日遠隔教育拠点が提供しているアプリケーション（「Nihongo123」「Basic Kanji Plus」「SuMo Japan」）について、直近5年間（「SuMo Japan」は2019年度提供開始のため直近4年間）の新規ダウンロード（DL）数および一ヶ月あたりの平均DL数を図4に示す。

一ヶ月あたりの平均DL数を見ると「Basic Kanji Plus」と「SuMo Japan」は2022年度にやや減少がみられるものの、これまでの傾向から9月以降の集計で過年度とあまり変わらない数値に落ち着くのではないかとと思われる。しかし、「Nihongo123」は2018年度から一貫して利用が減少傾向にある。その要因については、内容面やユーザビリティ等から今後検討すべきかもしれない。

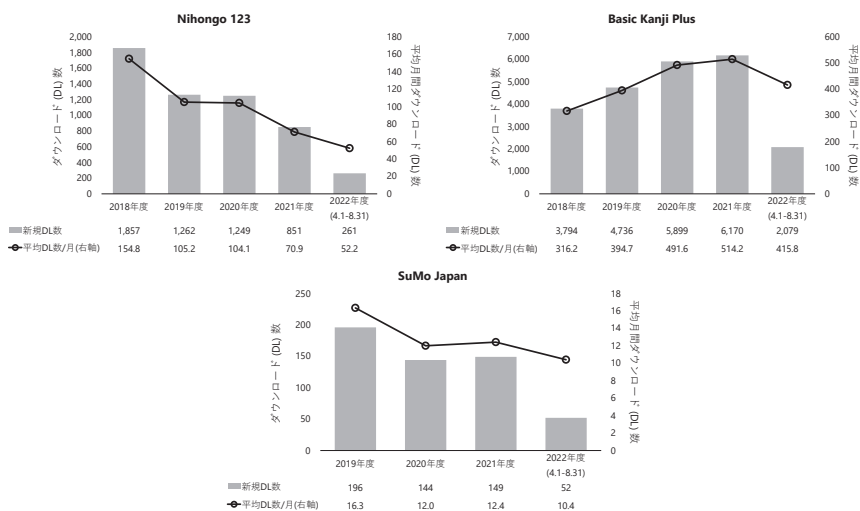


図4 アプリケーションの利用状況（ダウンロード数）

3. 新規コンテンツの公開や既存コンテンツの改修

2022年3月10日よりパイロット事業が開始されたオンライン国際教育プラットフォーム「Japan Virtual Campus (JV-Campus)」に「日本語マグネット」が公開された。また、同年6月1日には新規 Web コンテンツである「にほんごアベニュー」の提供を開始した。さらに、4月1日には日本語学習における形成的評価をサポートする「Assessment for Learning through Portfolio System (ALPS)」のプロトタイプが完成し、学内関係者で試験運用を行なっている。ここではそれらに「SuMo Japan」への機能追加を含めて報告する。

3.1 「日本語マグネット」の公開

「日本語マグネット」は、日本語が現代の日本語社会でどのように使われているかについて、日本語の教科書から離れて紹介するアニメーションの日本語教育・日本紹介教材である（図5）。日本語に関する様々なテーマを取り上げ、日本語や日本理解のみならず、母語・母文化との比較を通じた多様性の理解を目的としている。

JV-Campus 内にある「日本語教育パッケージ Box」で提供されており、現在は「日本語の特性」「日本語の数」「日本語の名前」「日本語の方言」の4章が公開されている。対象レベルは中上級から上級が想定されているものの、アニメーション教材には字幕（日本語のルビあり/なし、英語）を付けることが可能である。また、日本語の表現や会話のテンポ・リズムにも配慮した設計になっている。今後も順次テーマが追加され、全15章になる予定である。



図5 「日本語マグネット」トップページ

3.2 「にほんごアベニュー」の公開

2022年6月1日に、「にほんごアベニュー」を公開した(図6)。本コンテンツは学習者に日本語の使用場面を提示することを目的に、具体的な状況で展開される多様な会話例が参照できるものである。

会話は、紹介する・たずねる等の「はたらき」、大学生・会社員等の「話者」、学校・職場等の「場所」、雑談・買う等の「場面」によって整理されており、これらを自由に組み合わせることで「ある(詳細な)状況にふさわしい日本語の例」を検索・確認するこ



図6 「にほんごアベニュー」

(左：トップページ 中：会話例検索画面 右：Can-do と会話例)

とができる。そのため、様々な場面における大学生の生活日本語を学ぶことも可能である。

日本語表現は CEFR A1 レベルの Can-do に基づいており、ユーザーはプリセットの会話例を閲覧するだけでなく、システムに登録すれば同じ Can-do に沿った自作の会話例を投稿することも可能で、他のユーザーからフィードバックを得る機能も備えられている。また、プリセットの会話例には読み上げ音声を用意されているため、教師がクラスでディクテーションや発話推測のリソースとして活用することも考えられる (Can-do やクラスでの具体的な実践方法は、本コンテンツ内の「Can-do 一覧」および「日本語の先生へ」で参照可能)。

「にほんごアベニュー」は Web コンテンツであるが、スマートフォンアプリのように操作できる PWA (Progressive Web Apps) で作られている。そのため、本コンテンツの Web ブックマークをスマートフォンのホーム画面に登録することで、アプリケーションと同じように利用できるという特徴がある。

3.3 「ALPS」のプロトタイプ完成と試験運用

教育の国際化やオンライン授業の劇的な普及に伴い、リモートで学ぶ学生の存在が以前より一般的になっている。それらの学生に対しては、学習の進捗を把握することが難しく、定期試験の結果だけで成果を判断するのは困難である。このような問題背景のもと、学生が様々な学習成果を保存でき、教員による形成的な評価をサポートする評価システムの構想・開発を 2021 年度に行なった。そして、2022 年 4 月 1 日に「Assessment for Learning through Portfolio System (ALPS)」という名称でプロトタイプ版が完成した。

ALPS は、教員が CEFR のレベルで作成した様々なタスクに対して、学生がその成果物を保存できるポートフォリオサイトである。学生は会話の動画や音声、作文などをアップロードし、教員は評価基準に沿ってそれらを評価する。

現在は主に CEGLOC 日本語教育部門の関係者による試験運用を行っており、内容・機能やユーザビリティを検討している。また、将来的には能力認定の仕組みを整備する予定であり、そのための準備を進めている。2022 年度中に試験運用および本公開に向けての改修を終え、2023 年度に公開する予定である。

3.4 「SuMo Japan」グループ機能の追加

「SuMo Japan」は困ったことがあればアプリ内でユーザー同士が質問・回答を行なう質問掲示板型アプリであるが、新たに「グループ機能」を実装した。これは、公開したくない質問や市町村単位などで質問の窓口を作成したいケースを想定し、質問投稿時に「グループ」を選択することで、ユーザーが特定のグループのみと直接質問・回答のやりとりができるようになる機能である。

4. シンポジウムおよび講演会の開催

2021年11月に主催シンポジウム「日本語語彙辞書を利用した新たな研究」、2022年2月と8月には共催として第4回および第5回「未来志向の日本語教育」を開催した。また、2022年9月17日にはオンライン講演会「日本語教育のための最適なインプットとは？」を主催し、6月から11月にかけて「日本語教育とICT活用を考える」というテーマで全4回の講演会を企画・実施した。

4.1 シンポジウム

2021年11月13日にオンラインシンポジウム「日本語語彙辞書を利用した新たな研究」を日日遠隔教育拠点主催で開催した。元東京国際大学の川村よしこ氏による基調講演「リーディング・チュウ太の現状と課題」の後、5件の口頭発表が行なわれ、47名の参加を得た。

2022年の2月16日と8月4日には、CEGLOC日本語教育部門を主催として本拠点が共催で加わっているシンポジウム「未来志向の日本語教育」の第4回と第5回が開催された。第4回は7件、第5回は10件の口頭発表があり、第4回ではボン大学の田村直子氏による基調講演「ドイツの高等教育機関でのCEFRの文脈化の試みー反転授業にした日本語文法講義ができることー」が行なわれた。

4.2 講演会

2022年9月17日に、第二言語習得理論の分野で世界的な碩学であるスティーブン・クラッシュン (Stephen Krashen) 氏、および四天王寺大学短期大学部名誉教授であるメイソン・紅子氏によるオンライン講演会「日本語教育のための最適なインプットとは？」を主催した (Zoom Webinar による開催)。非常に貴重な機会とあって当日は437名もの参加者があり、講演のみならず質疑応答も活発に行なわれた。

また、「日本語教育とICT活用を考える」というテーマのもと2022年度の6月から11月にかけて全4回の講演会を日日遠隔教育拠点が企画・実施した (表2)。

講演会は理念編とツール編で構成され、前者では講師のICT活用に関する考えを共有するとともにフロアとの意見交換を通して理解を深めることを目的とし、後者ではコンテンツ開発に関わる日本語教育関係者を講師としてワークショップを行ない、一部機能に特化して参加者がすぐにコンテンツが使えるようになることをねらいとする。

本稿執筆時点で開催済みの第3回までの参加者数は、第1回172名、第2回44名 (人数限定で申込多数のため抽選の結果)、第3回152名と、いずれも盛況であった。アンケートの結果も満足度が非常に高く、多くの参加者にとって有益であったことから、本拠点の目的の1つである「知識基盤社会におけるテクノロジーを活用する教育人材の養

成」に合う取り組みであったといえるだろう。

表2「日本語教育とICT活用を考える」

第1回	2022年6月3日(金) 14:00-16:00	理念編
	講師：山田 智久 (西南学院大学)	
	題目：日本語教師とICTの親和性～技術受容モデルの観点から～	
第2回	2022年7月27日(水) 14:00-16:00	ツール編
	講師：熊野 七絵 (国際交流基金)	
	題目：オンラインコースの活用を考える - いろいろ日本語オンラインコース -	
第3回	2022年9月13日(火) 14:00-16:00	理念編
	講師：義永 美央子 (大阪大学)	
	題目：ポストコロナ社会における日本語教育者の生きる道	
第4回	2022年11月22日(火) 14:00-16:00	ツール編
	講師：峯松 信明 (東京大学)	
	題目：(原稿執筆時点で未開催のため未定)	

5. おわりに

本報告では日日遠隔教育拠点の2021年秋から2022年夏にかけての主な活動を報告した。ここでの報告以外にも、ホームページのリニューアルやアプリ・サービスの細かなアップデート、各種イベントへの協力など、利用者の利便性や日本語教育への貢献を念頭に置いた活動を常に行なっている。来年度は第三期の終盤である点を意識しつつ、これまでの知見や日日遠隔教育拠点の持つ強みを活かしながら、引き続き拠点制度の目的に合う活動に邁進していきたい。

参考ウェブサイト

- ・日本語・日本事情遠隔教育拠点 HP

<https://www.intersec.tsukuba.ac.jp/~kyoten/>

- ・JV-Campus 日本語マグネット

<https://www.jv-campus.org/contents/japanese-magnet/>

※ いずれも2022年9月22日閲覧